

28 juin 2008



#97 Négritude

フランス語トピックはセネガル詩人のレオポルド セダール サンゴールの話題についてセネガル大使館のアダマ バリーさんインタビュー。レッスンでは条件法を取り上げています。

☆パーソナリティ

ボブ & ちなみ

☆今週のゲスト

恒川邦夫さん
一橋大学名誉教授

Adama Barryさん
セネガル大使館 一等書記官

Générique et intro

Le 28 juin 2008, quatre-vingt-dix-septième numéro de chocolat, magazine bilingue français – japonais.

La Négritude avec, d'abord, une évocation d'Aimé Césaire avec le professeur Tsunekawa.

La Négritude de Léopold Sédar Senghor ensuite, avec Adama Barry, diplomate sénégalais.

「エメ・セゼール...」

フランスの黒人詩人で偉大な政治家であったエメ・セゼール。この4月、94歳の生涯に幕を閉じました。一橋大学名誉教授、アフリカカリブ海黒人作家研究をされている、恒川邦夫先生にお話を伺いました。

Aimé Césaire, né en Martinique, se rend à Paris pour y faire des études supérieures. C'est là qu'il rencontre Senghor, venu lui du Sénégal. De cette rencontre va naître l'idée de "négritude". La Négritude est un concept qui définit la place de l'homme noir dans une société dominée par les blancs.

覚えよう petit à petit♪

moyen

平均的な、普通の

intellectuel

知識人、インテリ

sénégalais

セネガル人、セネガル(Sénégal)の

agrégé

教授資格者、アグレジェ

défenseur

擁護者、弁護士

théoricien

理論家

négritude

黒人性、ネグリチュード

affirmation

断言、肯定、主張

en tant que...

...として

Noir

黒人

Nègre

(やや軽蔑的に)黒人、ニグロ

(所有形容詞) + propre + (名詞)

～自身の

déboucher sur...

...に通じる、に行き着く

métissage

混血

rendez-vous

(約束された)出会い

l'Universel

普遍性

famille nucléaire

核家族

fruit

果実、成果、子供

participer à...

...参加する、協力する

enracinement

深く根をおろすこと、定着

s'imprégner de ...

...を吸収する、...がしみ込む

terroir

郷土

Adama Barry...

Léopold Sédar Senghor, premier Africain à être admis à l'Académie française et premier Président du Sénégal de 1960 à 1980.

Adama Barry: Ah Senghor c'est... Il représente, pour le Sénégalais moyen, c'est le père de la nation, c'est avec lui qu'on a eu notre indépendance, en 1960. Pour l'intellectuel sénégalais, Senghor c'est l'homme de culture, c'est l'homme politique, le premier agrégé africain en grammaire. C'est le défenseur, c'est le théoricien avec, concrètement c'est Césaire, théoricien de la Négritude. Sa définition, c'est l'ensemble... pour Senghor, la Négritude c'est « l'ensemble des valeurs de civilisation du monde noir ». C'est une affirmation pour dire que nous, en tant que Sénégalais, en tant que Noirs, en tant que Nègres, nous avons nos propres valeurs de civilisation, donc en fait c'est ça qui a débouché sur la Négritude, qui..., comme l'a dit Senghor : « c'est l'ensemble des valeurs de civilisation du monde noir ». C'est ça, la définition de Senghor. Et, il a été le premier à défendre l'idée du métissage culturel, le rendez-vous du « donner » et du « recevoir », la civilisation de l'Universel. Au lieu de parler de choc des civilisations, il a parlé de « dialogue des civilisations » : le « donner » et le « recevoir ».

Bob: Et vous Monsieur Barry, si vous deviez choisir une œuvre de Senghor, ce serait laquelle ?

Adama: Là, je choisirais... Chants d'Ombres (Le Seuil – 1945), parce que dans Chants d'Ombres, Senghor parle de son enfance, tout homme sénégalais se retrouve avec, à travers ce poème.

Bob: L'enfant au Sénégal, il a un rôle particulier ? Vous dites que l'enfance pour les Sénégalais « tout le monde s'y retrouve », il est particulièrement important dans une famille, l'enfant au Sénégal ?

Adama: Absolument. Parce que l'enfant, c'est pas comme dans le système occidental où, bon, c'est la famille nucléaire. L'enfant... l'enfant, il est l'enfant d'un groupe, donc il a sa famille, il a son père, il a sa maman, mais il est le fruit de la communauté, donc toute la communauté participe à son éducation, à son enracinement. C'est un terme aussi que Senghor emploie beaucoup, « enracinement », c'est-à-dire s'imprégner des valeurs de civilisation de son terroir, etc. pour pouvoir s'ouvrir aux autres, donc l'enfance est une période très importante.

petite leçon: ぶんぽう一口メモ

1) フランス語の基本

条件法の基本用法 (**si** + 直接法半過去, 主節の動詞=条件法)

- **si vous deviez choisir une œuvre de Senghor, ce serait laquelle ? — Là, je choisirais... Chants d'Ombres.** (もしサンゴールの作品をひとつ選ばなくてはならないとしたら、それはどんな作品でしょうか? — そういう場合は、私なら「影の歌」を選ぶでしょうね。)

ここでは、条件法の使い方の基本形式がみられます。それは、**Si**に続く従属節に直接法半過去、主節には条件法現在を用いる構文です。通常は、これは「事実に反する仮定」(もし～だったら、～なのに)を表します。

しかし、上記のセネガル大使館員バリーさんへのボブさんの質問は、日本語の敬語表現に似た丁寧な言い方になっていて、「事実に反する仮定」ではありません(もちろん、「もし万が一～だったなら、いかがですか?」というニュアンスがあり、本来は事実に反する仮定から派生した表現なのですが)。ですから、この場合、直接法現在を用いても意味は同じで、ただ言い方が直截的になるだけです: **si vous devez choisir ..., c'est laquelle ?** (もし...を選ばねばならないなら、それは何ですか?)。

このように条件法が丁寧な言い方になる場合もあることを念頭に置いたうえで、その起点となる基本用法、つまり「事実に反する仮定」をまずしっかり覚えましょう。

例) **Si j'avais un enfant, ma vie serait plus gaie.** (もし私に子供がいたとしたら、私の人生はもっとにぎやかだったろうに。)[実際には子供がいないので、にぎやかではない。]

2) フランス語のコツ

2-1) **être le premier [la première] à** + 不定詞 (～する最初の人[もの]である)

- **il a été le premier à défendre l'idée du métissage culturel.** (彼は、文化的混血という考えを擁護した最初の人です。)

例) **Elle a été la première à concevoir ce projet.** (この計画を最初に考えたのは彼女です。)

2-2) **au lieu de...** (...しないで、...する代わりに)

« **au lieu de...** »は、よく使われる重要表現のひとつです。「～ではなく、代わりに、～する」

- **Au lieu de parler de choc des civilisations, il a parlé de « dialogue des civilisations »...** (彼は、文明の衝突については話さずに、代わりに、諸文明の対話について語りました。)

例1) **Nous prenons le rapide au lieu de l'omnibus.** (私たちは、普通列車ではなく、特急に乗ります。)

さらに、本号で紹介するAimé Césaireの言葉も引用しておきましょう。ここでは、《**au lieu de** + 不定詞》となっています。

例2) **... « au lieu de faire tout comme un Blanc », il faut rester au contraire bien noir, ...** (なんでも白人の真似をするのではなく、逆に、立派に黒人としてとどまるべきだ...)

サンゴールとセゼールーネグリチュードの詩人

1930年代初頭のパリは、ナチズムやファシズムの急流に押し流され始めた近隣諸国の雰囲気にも染まることなく、自由と社会参加と行動の気風に溢れていました。そんな時代に、大志を抱いてパリの名門高校に留学してきた二人の黒人青年がいました。二人は出会ったその日から意気投合して、黒人としてのアイデンティティに目覚め、生涯にわたる友情を結ぶことになります。一人は、カリブ海に浮かぶ仏領マルティニック島出身のエメ・セゼール **Aimé Césaire** (1913-2008)、そしてもう一人は、仏領セネガル出身のレオポルド・セダール・サンゴール **Léopold Sédar Senghor** (1906-2001)でした。セゼールは、「サンゴールと出会ったとき、私は自分がアフリカ人だと感じた」と述べています。二人はともに言語と詩作に稀有の才能をもっていました。そして、仏領ガイアナ出身のダマ **Léon Gontran Damas** (1912-78)も加わって、詩と文学と政治に熱意を向ける三人の若者が、文学雑誌「黒人学生 **L'Étudiant Noir**」(1934)を創刊し、沈黙を守っていたパリの黒人学生たちに向けて、黒人としての自己意識をもち、声をあげ、フランスの植民地主義政策に反対するよう訴えました。

この雑誌でセゼールは、「私は抑圧された人々の人種に属する」と述べて、黒人性の自覚を促す「ネグリチュード **négritude**」の思想を提唱します。セゼールによれば、「ネグリチュード」とは、「黒人であるという事実を再認識し、黒人としてのわれわれの運命、歴史、文化を受け入れること」でした。セゼールに賛同したサンゴールは、「ネグリチュードは、黒人世界の文化的諸価値の全体 **l'ensemble des valeurs culturelles du monde noir**である」と述べています。

象徴を駆使した美しい言葉を用いて、疎外からの解放と植民地主義への闘いを歌う黒人青年の詩は、まず、芸術と文学と政治を統合したシュールレアリスム運動の総帥アンドレ・ブルトンに認められます。アフリカ芸術に大きな関心を寄せていたブルトンは、セゼールの詩を「この時代のもっとも偉大な抒情的モニュメント」と讃えました。こうしてセゼールは、シュールレアリスム運動に与し、マルクスやフロイトの思想に心酔し、「多くの言葉のナイフで武装して **armé de mille couteaux de mots**」、鋭い反逆と革命の詩人として知られるようになります。フランス文化への同化政策という文化的抑圧に対抗して、アフリカ人とその文化の独自性を主張するセゼールの言葉は、フランツ・ファノンをはじめ多くの作家や、植民地化された国々の若者たちに強い影響を与えました。

一方、サンゴールは、優れた言語能力を発揮して、1935年に文法教授資格 **agrégé de grammaire**を取得します。アフリカ人初の快挙です。第二次大戦で従軍した彼は、ドイツ軍の捕虜になり銃殺されそうになりました。あやうく死を免れ逃げながら彼は「フランス万歳、ブラック・アフリカ万歳」と叫んだそうです。戦後サンゴールは、フランス語教授となり、詩を書き続け、黒人詩人の詩集を編纂します。このとき、黒人文化の独自性を主張しつつ、黒人としての己の現実を認めたとえ己の運命をみずから選択するというサンゴールのネグリチュード論に共感を覚えたのは、実存主義哲学の旗手サルトルでした。サルトルはこの詩集のために「黒いオルフェ **Orphée noir**」(1947)と題する序文を贈り、「ネグリチュード」をこう定義しました。それは、「黒人の世界内存在 **l'être-dans-le-monde du Noir**」である。そこには「己自身および他者のひとつの選択 **un choix de soi-même et d'autrui**」があり、「体験のなまの所与を乗り越える態度 **une façon de dépasser les données brutes de l'expérience**」があって、ようするに「ひとつの企図 **un projet**」である、と。サンゴールのネグリチュード論は、黒人性の擁護にとどまらず、「普遍性の文明 **civilisation de l'Universel**」に向かいます。彼によれば、「ネグリチュードは人種差別主義ではなく **La Négritude n'est donc pas racisme**」、「ひとつのヒューマニズム **un Humanisme**」なのです。故郷の大

地に深く根ざして **enracinement** 己の文化の精神性を受け継ぐと同時に、外国文化に心を開き、「他の諸文明との対話 **un dialogue avec les autres civilisations**」を推し進めて、他者の豊かな恵みを得ることが大切だとサンゴールは言います。こうした諸文化の「混血 **métissage**」により、普遍性ある「全面的ヒューマニズム」が得られると彼は考えました。「対立するイデオロギーが暴走し、敵対する憎悪が荒れ狂い、血が流され涙にくれる **le déchaînement des idéologies antagonistes, la frénésie des haines qui s'affrontent, le sang versé et les larmes répandues**」、そんな現実に対抗するネグリチュードの思想は、あらゆる人々にとって友愛と普遍性を求める闘いとなるのです。

文学者だけでなく、政治家としても精力的に活動したサンゴールは、1960年に故郷セネガルが「一発の銃声もなく」平和的独立を達成すると、初代大統領に就任します。その後、20年間にわたって大統領を務めたあと、みずから辞職しました。「一介の詩人に戻るために **pour redevenir simple poète**」権力の座をおりたのだ、と彼は述べています。そして、1983年には、アフリカ人として初のアカデミー・フランセーズ会員に選ばれる栄誉を手にしています。

ネグリチュードの「プリンス」セゼールも、セネガル建国の父サンゴールも、共に今世紀まで長生きし、多くの人々に惜しまれながら世を去りました。セゼールが95歳で亡くなったのは、今年四月のことでした。最後に、セゼールとサンゴールの詩を少しだけ紹介しましょう。言葉の美しさと音楽性を味わってください。セゼールは、代表作《**Cahiers d'un retour au pays natal** 生まれ故郷への帰還の手帖》(1956)で、ネグリチュードの解放の思想を次のように歌っています。

《**... à moi mes danses / mes danses de mauvais nègre / à moi mes danses / la danse brise-carcan / la danse saute-prison / la danse il-est-bon-et-beau-et-légitime-d'être-nègre**》（私のダンスは私のもの / ひどいニグロの私のダンス / 私のダンスは私のもの / それは首かせを打ち砕くダンス / 牢獄を破壊するダンス / 黒人-であることは-善いこと-すばらしいこと-正当なこと、と踊るダンス）

サンゴールの詩の特徴は象徴表現にあるといわれます。セネガル大使館員バリーさんが推薦する詩集《**Chants d'ombres** 影の歌》には、《**Femme noire** 黒人の女》が次のように描かれています。

《**Femme nue, femme obscure/(...) Gazelle aux attaches célestes, les perles sont étoiles sur la nuit de ta peau**》（裸の女、暗色の[膚の]女よ... 天上の足首をもつガゼルよ、パールのような水玉は、おまえの膚の夜に輝く星）

文化の違いを越えて「普遍性の文明」を築きたいと願ったサンゴールは、言葉の象徴的使用が文化差を結びつける基盤になると考えました。アフリカの語り部グリオの魔術的表現を受け継ぎながら、彼は音楽性を詩の魂とみなし、アフリカ音楽のリズムを詩に取り入れています。

« **Écoute au loin battre ton cœur nocturne, rythme et sang du tam-tam, tam-tam sang et tam-tam** »（聞け、遠くで響くお前の夜の心臓の鼓動を、タムタムのリズムと血を、血のタムタムを、そしてタムタムを...）

彼の詩は、アフリカの踊りや太鼓のように語りかけ、身体と心をつき動かし、「死者と生者の間、現在と過去と未来の間に境目のない」超現実的な「子供時代の王国 **Royaume d'Enfance**」へと誘うのです。